

平成3年度修士論文要旨

その他のタイトル	Summaries of master theses,1991
著者	岡沢 英雄, 太田 耕平
雑誌名	教育科学セミナー
巻	24
ページ	64-66
発行年	1992-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019470

関係の物象化と「正常／異常」問題

教育学 岡 沢 英 雄

本稿は、近代的世界観のパラダイムを批判し、その超克をはかる廣松渉氏の哲学の構造を分析し、その知見をふまえて、「正常／異常」問題という具体的・現実的な問題へのアプローチを試みることを目的とするものである。

ここにいう「正常／異常」問題とは、いわゆる障害者——本稿では、特に精神異常者——に対して向けられるまなざしの根底にある「正常／異常」の境界線をめぐる問題として、筆者の規定するものである。それは「正常」と「異常」との区別が客観的であるとみなす日常意識への疑念と、「正常／異常」の境界線の根拠そのものへの問いとして現れることになる。

この問題に対する手がかりを、廣松哲学は与えてくれるように思われる。廣松氏においては、関係論的視座から物象化論・四肢的構造論・事的世界観が展開されるわけであるが、「正常／異常」問題もやはり同様に、関係論的な観点からとらえられる必要があると考えられるからである。

本稿はまず序論として「関係の物象化と教育」がおかれ、そのあと第一部「関係の物象化——廣松哲学の基礎構造」、第二部「『正常／異常』の問題構制」という構成をとっている。まず序論では廣松氏の物象化論、関係主義について概略し、あわせて教育過程において物象化現象が、教師—生徒の役割、知識、カリキュラム、能力という面でみられることを示しておいた。

第一部では廣松哲学の基本的構造が分析される。まず第一章で現相的世界の四肢的構造が明らかにされる。四肢的構造とは、簡潔に言えば

「所与がそれ以上の或るものとして『誰』かとしての或る者に対してある」というものである。廣松氏はしかし、この四肢的構造を、四つの自存する項からなる関係としてとらえるのではなく、四肢は関係項としてのみはじめて存立するというのである。そして四肢を実体的に措定する見方を、物象化的錯視としてしりぞけるのである。

かかる「関係の第一次性」という提題のもとに、廣松氏の諸論は位置づけられるのである。本稿ではそれを第一章の認識論以下、言語論、判断論、役割論の順に検討していくことになるが、例えば第三章では、判断における「客観妥当性」——事象・事態が“客観的に”アル、ということ——とは、実は人々が共同主観的に一致してそう認知・呼称することの謂いにすぎず、つまり「客観妥当性」とは、共同主観的關係を通して形成されるものである。とされている点が見られる。また第四章では、人間の人格性とは役割の総体というかたちでしか規定できず、本来的自己なるものを実体的に自存化することはできないこと、また「自己」は自他未分の関係態から、「他己」と相補的に分立するものであること、このような廣松氏の指摘を取り上げている。

そしてこうした廣松哲学の分析を経て、第二部では「正常／異常」の枠組が問題とされることになる。第一章では、「正常」「異常」が客観的にあるとする見方に疑問を呈し、「正常」と「異常」の区別が決して没価値的なものとはいえないことを指摘し、さらに「理性／狂気」の関係から、両者が相互補完的な概念であり、

またその区別が歴史的に相対的であることを示した。そして、廣松氏の判断論を援用しながら、あるものが“異常”だとされるのは、人々の共同主観的な判断によるものにすぎないのではないかとした。

第二章では、精神病理に関する近年の理論（反精神医学：山本耕一、A.クラウス、木村敏）が検討される。これらの論者は、いずれも近代的なパラダイムによらずして精神病理現象を分析せんと試みている。彼らの論から、精神の病いが、単なる個人的な出来事ではなく、自他の関係の場において生じるものであること、そして特に後三者からは、廣松氏と同様、自己なるものを実体的に措定することはできないとい

うこと、が読みとれるのである。

そして第三章では、まず「異常」「障害」をマイナス視・劣等視する見方を批判し、さらに第二章をふまえて精神病患者として排除されている人々と、本来関係態にあるところのものから「自己」を物象的に実体化させることによってしかみずからの「自己」を生きえない我々とは、どちらが「正常」であるとも「異常」であるともいえないのではないかと問題提起した。そして「正常／異常」問題を超越するには、「正常／異常」の枠組そのものが揺るがされるような知のあり方が摸索されること、すなわち近代的世界観のパラダイムが超克されること、この必要性を主張して結びとした。

類推的思考の自発的使用の要因についての検討

教育学 太田耕平

類推的思考は、次の4つの要素に分類することができる。(1) 有用だと思われるソースの検索、または選択、(2) 対応付け (Mapping)、(3) 類推的な推理、または転移、(4) その結果に伴う学習。このような分類は、研究を進める上で有効なことが多いが、本論文では統合的な視点から類推的思考を研究することも可能であることが指摘された。特に、類推において重要な役割を果たす、検索（自発的な検索）と対応付けの段階について、過去の研究成果を基に検討を行い、両段階には、多くの共通点が見いだされることを示した。その共通点として、まず示されたのが、表面的類似性と構造的類似性の働きである。いずれも、それぞれの段階におい

て、類推的思考に大きな影響をもたらすことが、多くの研究から明らかにされている。本論文ではさらに、これらの2種の類似性の他に、コンテキストという共通要素が両段階にあることを指摘した。その特性について、いくつかの研究を参照しながら検討が行われ、コンテキストの効果は対応付けよりも、自発的検索の段階で大きな影響をもつこと、また、ソース、ターゲット自体からは定義できないものであり、有効な知識を引き出すためには、重要な要因であることが主張された。

このような検討の結果、今後の類推研究の方向性として、次の3つが提示された。

(1) 対応付けで有効性が示された要因を、さ

らに強調する方法を検討し、自発的検索の促進のために適用する。

(2) 類推に影響を与える（あるいは、影響するであろうと予測される）諸要因が、類似課題をいくつか経験していく過程で、どのような特性を示すかを検討する。

(3) コンテキストの働きをより明確にする。
また、課題に対する人間の能動的な働きかけの要因を軽視しない。

そこで本論文では、上記の(1) (2)に基づいて、3つの実験が行われた。実験Ⅰでは、提示されたストーリーを図の作成によって表現することが自発的転移を促進するか否かが検討された。結果は、自発的転移は促進されなかったが、ソース、ターゲットの双方で図を作成した条件群において、適用には有効性をもたない視覚的類似性の影響が生じることが、解答後の質問から示された。実験Ⅱでは、図の作成の効果を引き出すために、問題を構成している制約 (Constraint) に注意を向けさせる課題を付与

した。その結果、図の作成と制約の要約の両課題を行なった群において、自発的転移が促進された。さらに実験Ⅲにおいて、4つの類似課題を順次与えていくという課題を与えて、図の作成群、制約の要約群、類似した領域の課題ばかりが提示される群、統制群の各々の結果の変化について比較検討を行った。また、この実験では、問題の解答を求めめるだけでなく、特殊領域の知識の有効性の評定と、課題を構成している「要素間の関係」、「要素」のいずれに注目するかを選択課題が課された。実験の結果、最終試行で、制約要約群の解答成績がよいこと、図の作成群において関係の注目率が高く、類似領域課題の提示群では逆に低いことなどが示された。これにより、特に注目すべきこととして、図の作成と表面類似のそれぞれの効果による転移の結果が、異なる過程によるものであることが示唆された。最後に、本研究を振り返って今後の研究課題として、コンテキストの重要性が確認された。